

野鳥たより

—北海道—

第36号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和54年7月7日



フクロウ 野幌 昭和54年6月9日 撮影 村野紀雄



も く じ

探鳥地案内 帯広農業高校……………藤巻裕蔵……2
 釧路市「春採湖」の野鳥……………橋本正雄……3
 探鳥会案内……………4
 えぞ鳥獣夜話……………安田鎮雄……5
 ハイイロガンの発見……………藤原直人……6
 ノドグロツグミの確認状況……………木内 栄……6
 トングリゲラと貯蔵木……………斎藤新一郎……7
 天売島のアカゲラと天売・焼尻の鳥類観察記録……………鈴木 悌 司……8
 「市町村の鳥」の制定運動を……………三浦二郎……8
 探鳥会報告 — ウトナイ・野幌・野幌……………9
 昭和54年度総会経過報告……………11
 鳥民だより……………12

探鳥地案内

⑥

- ◆位置 帯広市稲田町・帯広駅から6 km
- ◆概況 周囲は住宅地、農耕地にかこまれているが、構内にはカシワ・カラマツ林があり「帯広農校環境緑地保護地区」に指定されている。森林・草原両方の鳥類がみられる。
- ◆交通 帯広駅からバスで20分。十勝バスか国鉄バスで「畜大農場前」行に乗り、「農業高校前」で下車、ここから探鳥が始められる。
- ◆探鳥コース 正門を入れてまっすぐ進む。左側はカシワ林、右側は校舎。500 mほど歩くと左側はカラマツやカシワの林で右側は牧草地となる。さらに500～700 m進むと農校の構内は終りとなり、ここから引き返す。時間があれば、途中から右へ曲り、畜産大学の農場へも行くことができる。市街地に近いわりには鳥は多く、1978年には、オオタカ・ハイタカ・ツグミが営巣した。この他コアカゲラ・トラフズクなども営巣する。
- ◆見られる鳥 ハイタカ・ヤマシギ・オオジシギ・ツツドリ・アカゲラ・コアカゲラ・ビンズイ・ノゴマ・クロツグミ・コヨシキリ・センダイムシクイ・キビタキエナガ・ハンブトガラ・ンジュカラ・ゴジュウカラ・シマアオジ・ベニマシコ・シメ・ニューナイスズメ・コムクドリなど。

帯 広 市 近 郊

帯 広 農 業 高 校

- ◆注意 高校の構内なので、観察のときには道路だけを歩き、農耕地などに立入らないで下さい。
(藤巻裕蔵)

◆地図



釧路市「春採湖」の野鳥

橋 本 正 雄

春採（ハルトリ）湖は、釧路市のほぼ中央にある周囲4.6kmの自然の湖で、かつてアイヌの人々は「ハル・ウトル・トウ（食糧の豊富にあるところの湖）」と呼んでいた。現在では、湖周辺はすっかり市街地となっており、都市下水の流入による湖水の汚染が進み、春採湖が昭和12年に緋鮒の生息地として天然記念物に指定されていることから湖の汚染は大きな問題となっている。

湖は南北に細長く、南端は海と300m程しか離れていないが、湖の東側は太平洋炭礦の貯炭場と住宅地が湖岸まで迫っている。西側の湖岸は公園として整備されつつあり、わずかではあるが林が残されている。5～9月は、湖では貸ボートの営業が行なわれている。

鳥の生息環境としては、決して良い条件ではないのだが、春採湖に生息する鳥は意外に多く、日本野鳥の会釧路支部では4～12月の期間、毎月1回の採鳥会を一般市民を対象に開催している。

昭和46年からこれまでに筆者は、春採湖で30科96種の鳥を確認した。そのうち、カイツブリ・マガモ・ホシハジロ・バン・オオバン・カッコウ・ヒバリ・ハクセキレイ・ノゴマ・ノビタキ・エゾセンニュウ・シマセンニュウ・コヨシキリ・アオジ・オオジュリン・カワラヒワ・スズメ・コムクドリ・ムクドリ・ハンプトガラスの20種が繁殖する。

ホシハジロについては、昭和50年以来、毎年2～3番が繁殖している。なお、本邦でのホシハジロの繁殖は、春採湖が初記録である。

————— 筆者自身が確認

----- 生息の可能性がある

春採湖の野鳥リスト

科名	種名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
アビ	アシロエリオオハム				—									稀
カイツブリ	カイツブリ カミカイツブリ ハジロカイツブリ アカエリカイツブリ				—									普、繁殖 稀 稀 稀
ウ	ウミメ				—									稀
サギ	チュウサギ				—									稀
ガンカモ	オマシンド カコルガ ヨシガ ヒドリガ オハシビロガ ホシクハロハジ スオズロガ ホミコア ウミアイ				—									稀多、繁殖 稀多 少 普少 少 多、繁殖 普少 稀少
ワシタカ	トハノイスタ				—									普 稀 稀
ライチョウ	エゾライチョウ				—									稀
クイナ	オオバン				—									繁殖 普、多、繁殖
シギ	イソシギ オオシギ				—									少、繁殖不明
ヒレアシシギ	アカエリヒレアシシギ				—									稀
カモメ	エリカモメ セグロカモメ オセグロカモメ ウミミネカモメ アツビサシ				—									普 普 多 普 普 普 少
ハト	キジバト				—									稀
ホトトギス	カツコウ				—									少、繁殖

科名	種名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
アマツバメ	アマツバメ													少
キツツキ	アリスゲイ ヤマカゲ アマガゲ コゲラ													少 稀 普 少
ヒバリ	ヒバリ													多、繁殖
ツバメ	シウドツバメ ツバメ イワツバメ													多 少 少 少
セキレイ	キセキレイ ハセキレイ セビ													稀 普 稀 少
モズ	モアカモズ													少 稀
レンジャク	キレンジャク													普
ヒタキ	ノゴビタマキ ジョウビタキ アツカハ ツグハ ウグイス エゾマシユウ マキノセニユウ コヨシキリ オオソムシク エセンドムシ オオサザビ													少 稀 少 少 普 少 少 少 少 稀 多 稀 少 少 稀 稀 稀
エナガ	エナガ													稀
シジュウカラ	ハシブトガラ ヒヤマガ シジュウカラ													普 少 稀 普 少
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ													少
メジロ	メジロ													少
ホオジロ	ホオジロ ホシオ アオオ オオジュリ													稀 稀 少 多、繁殖 普、繁殖
アトリ	アカトラヒ カベシ													少 普、繁殖 少 少
ハタオリドリ	スズメ													多、繁殖
ムクドリ	コムクドリ													普、繁殖 普、繁殖
カラス	カケガラ シボソガラ ハシブトガラ													少 普 多、繁殖



10月までの予定をお知らせ
します。会員以外の方も歓迎
しますので、お誘い合せの上、
多数ご参加下さい。

＜鶴川海岸＞

- ・とき 昭和54年8月26日
・9月24日
- ・集合 国鉄日高本線「鶴川
駅」午前9時10分、

札幌発午前7時40分急行えりもが便利です。

主として、シギやチドリの観察

＜野幌森林公園＞

- ・とき 昭和54年10月28日

- ・集合 国鉄「大麻駅待合室」午前8時30分、渡りの
季節です。どんな鳥が現れるでしょうか。

＜野幌森林公園を歩きましょう。＞

上記の探鳥会のほか、次のように探鳥散歩を行います。
どうぞ、ご参加下さい。

- とき 9月30日・10月14日
- 集合 午前8時30分、大麻駅待合室

・探鳥会には、観察用具、筆記用具、昼食、雨具等を持
参して下さい。いずれも2時～3時頃には終了しま
す。ひどい暴風雨でないかぎり行きます。

・探鳥会についてのお問合せは、柳沢 851-6364 又は
羽田 611-0063へ。

えぞ鳥獣夜話 - 1 -

— 鳥獣調査のはじまり —

安田 鎮 雄

日本において本草学が発達したのは江戸時代である。本草学はほんらい薬用に供する植物、動物、鉱物の形態産地、効能等を研究する学問で、奈良朝の頃より中国から遣唐使によって導入され、博物的な学問になった。江戸時代には貝原益軒「大和本草」、小野蘭山「本草綱目啓蒙」、寺島良安「和漢三才図会」等、いずれも数十巻を超える大著があり、本草学者も多く輩出した。

本道の博物誌では、天明元年（1781年）松前広長が著した「松前志」がある。また、当時は多くの幕府要人や旅行者によって「東遊記」、「えぞ草紙」等の見聞誌が著されており、この中にも鳥獣に関する描写が多い。安政元年（1854年）前田夏蔭「千島志料」は、これら地誌類を集大成している。

鳥獣類の学術的な研究・分類は、幕末の頃渡航した米英、独人等によって進歩した。鳥類では安政5年、カンソン、慶応3年、ホワイトリー、明治7年、スエンホー等が、函館地方で得た鳥類の目録を発表している。

これら外国人の中で、最も本道に関係の深いのはトーマス・ライト・ブラキストンである。彼は英国の退役軍人で、文久2年（1862年）函館に来住、貿易商として活躍するかたわら、山野を跋涉し多くの標本を採取した彼は博学多識で、日本で初めての機械製材や、航海術、測量術等を伝えた。明治13年、1,338点の標本を開拓使函館仮博物場へ寄贈し、また16年、「日本列島と大陸の往古における連絡の動物学上の論証」をアジア協会に発表し、動物分布線としてのブラキストンラインを論証している。

明治政府になって最初の鳥獣調査は、明治16年4月、農商務大臣西郷従道から、各地方長官への指示によるもので、鳥獣を有益、有効、有害に分類して報告させた。当時の札幌県公文書によると、この調査は各郡役所に下命して取まとめており、同年6月、有益はシカ、有効は海獣類、有害はヒグマ、オオカミ、カラス、スズメを挙げて報告している。

明治15年編さんの「北海道志」には、物産として本道に生息する動物類を挙げて考証を加えているが、すべてを網羅したものではない。また明治31年から33年にかけて発行された「北海道殖民状況報文」にも、動物類の分布をとりあげているが、概況報告に止っている。

国の調査としては、明治16年に次いで同36年、全国各地長官、大管林区署長に鳥獣の繁殖期、渡りの季節等を調査させているが、当時の公文書は明治42年の道庁火災によって焼失している。

日本人による本道の鳥類目録は、明治34年村田庄次郎（北大博物館勤務）が「北海道鳥類一般」を動物学雑誌に発表しており、また同38年八田三郎、村田庄次郎による「北海道産鳥類目録」が、札幌博物学会報に発表されている。

大正11年11月、渡り鳥の全国調査は気象庁を通じて主要な船舶灯台に依頼して実施された。本道では能取岬、宗谷岬、地球岬、稲穂岬等が選ばれ、全国で59カ所で、37科、190種の渡り鳥が確認された。宗谷岬では夜間、灯台に衝突死したツグミが、毎朝バケツに数杯もあったと当時の新聞が伝えている。

野鳥の標識調査は大正13年から始められ、昭和18年まで続いたが、年々対象地を拡大し、最盛期には年間2万羽を超えた。昭和3年から標識の取得者に記念品を与えたが、本道での第1号は上川支庁管内風蓮市街の吉野一さんで、4月15日終猟日に捕獲した鴨が、前年山形県で放鳥した50羽の中の1羽であった。

鳥獣の調査はこのほか、個別には種々行われている。開拓使時代には有益獣としてエゾシカを対象とした生息調査が行われているし、昭和10年代には北大犬飼教授が大雪山系や、日高山系のエゾシカの調査を実施している。

また昭和13年、道東地方の漁民からハクチョウによる貝類の被害が問題視され、犬飼教授が160羽を捕獲して食性調査を実施した。この調査でハクチョウはアマモやイヌスギナ等、植物質の食餌が圧倒的に多いことが立証された。タンチョウや海鳥繁殖地の調査も大正末期頃から実施されて鳥獣の生態が解明された。

戦後は米軍の鳥獣担当官の行政指導のもとに調査事業も強化され、また日米、日ソ等国際間渡り鳥保護条約が締結されるにともない、各種調査研究活動も増大しているが、毎年1月に実施されているガン、カモ、ハクチョウの全国センサスは、ソ連中央自然保護研究所から日本鳥類保護連盟を通じて依頼のあったもので、昭和45年から継続実施され、年々その規模もふくらんでいる。

（続く）

ハイイロガンの発見

藤原直人

4月12日の朝、午前5時ごろ河川の水位の増えた旧石狩川へ、ガン、カモ類の観察に出かけた。

そのころ、キンクロハジロ、オナガガモ、ヒドリガモ、オオハクチョウ、コハクチョウ他、いろいろいました。始め、一番近くにいるキンクロハジロばかりに熱中していましたが、100mぐらい先の川岸近くにオオ、コハクチョウの群が16羽くらいいるのに気づきました。よく見ると、オオハクチョウの幼鳥らしきものが群の中に混っていましたが、どうも尾がつり上りぎみで、灰褐色でありすぎたため、これはおかしいと思い、約30mまで近づき、よく見ると、初めはマガンと思いましたが、マガンにしては、口に白い班紋がないし、口ばしも赤みが濃いで、3~4枚写真を撮り、学校もあるし、ひとまず家にもどりました。家で図鑑をひらき、調べてみると、どうもマガンには、似ていない。ぼくは、ハイイロガンにとても似ていたが日本で9回前後しか来たことがないので、やはり「マガンかなあ。」と思い残したまま、登校しました。

午後4~5時ごろ、羽田さん、平井さん、武田くん方から、「珍しい鳥いますよ。」と連絡が入ったとたん「ハイイロガンだな。」と思い羽田さんに聞いてみますと、やはり、「ハイイロガンです。」と言っていました。

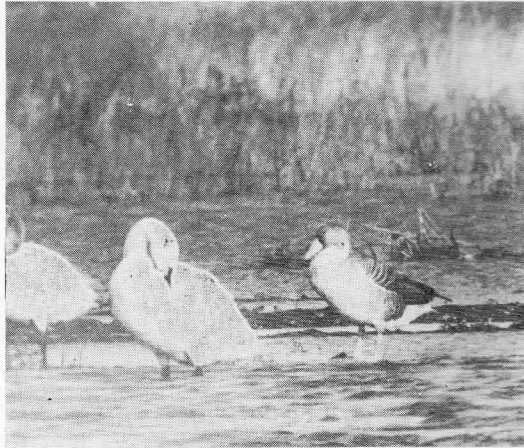
その後いろいろな観察によって、ハイイロガンは、コハクチョウなどの横にいつもついて行き、コハクチョウの餌をよこどりをして生活していたようでしたが4月23日には、浅い場所以外は、コハクチョウのように、さか

だちをして、餌を食べていました。また、ハイイロガンは、社会性が強く、いつもオオハクチョウやコハクチョウと、いっしょに行動をしています。警戒心は、わりに弱く、約50~30mまで近づけます。それ以上近づいても飛ばずに、ハクチョウらと、泳いで少しづつにげて行くくらいです。食性は、イネ科の実のようなものを食べているように思えました。

旅立ったのは、4月23日の早朝と思われます。無事に生れ故郷に帰ってくれればいいなあと思いました。

ハイイロガンとコハクチョウ

4月29日 江別市八幡



T067 江別市八幡124

ノドグロツグミの確認状況

木内 栄

とき=54.3.28日 午前7時30分頃の10分間

54.4.1日 午前8時5分頃の3分間

午前9時5分頃の30秒間

午前10時24分~28分の4分間

ところ=札幌市豊平区平岸1条5丁目平岸スターハイッ
B5棟の1階の庭及びその周辺(5階建13棟
275戸の団地の一角)

写真=3月28日:カラープリント用フィルム、二重ガラ
ス越、6枚、600ミリレンズ、距離5メートル

4月1日:カラーライド用フィルム、20枚、距離20メートル

その日の鳥の種類と数 28日:ムクドリ4 カワラヒワ
1 ツグミ20 ヒヨドリ5 シメ2 シジュウカラ5
~7 アカゲラ3 スズメ10 1日:ムクドリ1 カ
ワラヒワ4 ツグミ12 ハチジョウツグミ1 ヒヨド
ドリ8 シジュウカラ5 アカゲラ3 スズメ15~20
ハイタカ1

28日の出合=出勤までの合い間の日課で、7時頃から外

の鳥を見る。7時30分頃、20メートル先のコリンゴの木に、うしろ向の鳥を見つけた。ツグミともヒヨドリとも断定しかねる。しばし気になるまま動くのを待った。

やがて向きを変えた鳥が、ノドが黒く、初めて見る鳥であることに気づき、ガラス越しでも写真を撮る気持がおきる。急ぎ、三脚に取り付けたままのカメラを窓際へ運ぶ。その間に鳥は庭の5メートルぐらいのサラサドウダンの枝に来た。1/250で3枚、1/60で3枚シャッターを切った。それが、せいっぱいで、あっと云う間に、他のツグミを残し消え去ってしまった。

急ぎ図鑑を見て、ノドグロツグミであることを知る。出勤後、他に情報が入っていないが数人の野鳥関係者に電話をする。非常に珍しい鳥であることを知り、自分の判断と写真のできが心配となる。29日夕方できたばかりの写真を北方鳥類研究所長の齋藤春雄先生に見てもらい、確認してもらう。

関係情報—およそ10件、そのうち市内南区真駒内上町5丁目3の8の志尾壱さんの家族が3月21日の11時頃見たものは、同じものだったと思われる。

3月29日市内北区北30条西5丁目横井恵子さんの見たものは写真と似ているとのことであった。その他は、同

じものである可能性が感じられない情報や、別の鳥との見まちがいであった。



ノドグロツグミ

〒062 札幌市豊平区平岸1条5丁目3番B5の101

〈抄訳〉 ドングリゲラと貯蔵木

齋藤新一郎

ふつう、キツツキ類の主食は虫であるが、カリフォルニアキツツキ (*Melanerpes (=Balanosphyra) formicivorus*, California woodpecker) ないしドングリゲラ (*Acorn woodpecker*) は、主食がドングリであって、秋に枯れ木の幹に小穴をうがち、ドングリを貯蔵する。

ドングリゲラは、合衆国西海岸、メキシコ、中米からコロンビア北部まで広く分布し、ナラ林およびマツ・ナラ林に生活する。これは群居性が高く、1年を通じて、2~15羽の集団をつくっている。各集団は、ほぼ、1本の貯蔵木 (Storage tree, granary) をもち、マツがふつうで、ナラも利用し、この枯れた立木が倒れるまで利用しつづける。

カリフォルニア州での研究によると、マツ属はポンデローサマツ、ランバルティアナマツであり、ナラ属はクリソレピスナラ、ウイスリゼンナラなどが優占し、貯蔵木になるのは直径80~150cmの大径木である。幹にキツツキがうがちつ小穴は、直径1.2~1.9cm、深さ2.5cmほどであり、1本あたりの小穴数は750~2,900個になる。

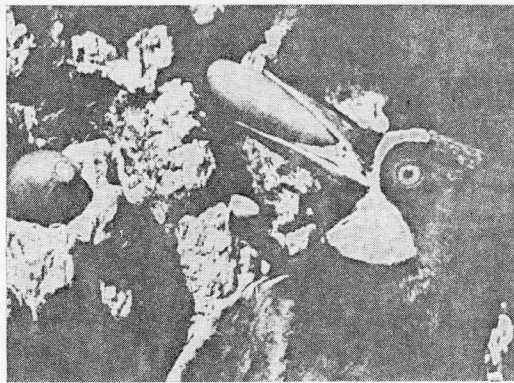
1集団のテリトリーは面積が1~9haくらいで、100haあたり16~40個ある。そして、各テリトリーに貯蔵木が1本、予備木が1本残される必要がある。予備木は過熟木ないし枯死近いものである。

ドングリゲラは、特殊な群居性のため、よく見られ、声のよく聞かれるキツツキである。その貯蔵習性から、

ナラ類の、ときにマツ類のたね散布に役立っている。貯蔵木はほぼ100%が枯れ木であり、このキツツキが穴をうがって立木を枯らすことはないと思われる。

林務官はドングリゲラの習性について、もっと関心を高める必要がある。枯れ木の除去や搬出にあたっては、このキツツキの生存に必要な貯蔵木の密度を考慮することが望ましい。

原著 R.J. Gutiérrez and W.D. Koenig, 1978: Characteristics of storage trees used by acorn woodpeckers in two California woodlands. *J. Forestry*, 76 (3):162~164.



ドングリゲラ

〒098-28 中川郡中川町中川430

天売島のアカゲラと天売・焼尻の鳥類観察記録

鈴木 悌 司

1977年5月と1978年6月に天売、焼尻両島の森林を調査する機会があり、そのなかで1977年5月18日、天売島東部のカラマツ人工林においてアカゲラ1個体と、同林内のキハダ樹幹部3~4mにアカゲラが穿けたと思われる(巣穴あるいは単なる穿痕でしょうか)が観察されました。樹幹に残された穿孔は1~2年前のものと思われる。

両島でのキツキ類の記録は、焼尻島で1951年にアカゲラ、オオアカゲラが、天売島では1965年にコゲラの観察例だけでそれ以降はみられないようです(樋口1978)。

同島の森林は、明治初期における乱伐と山火事によって殆んど荒廃してしまい、その後禁伐と植林によってかつての森林をとり戻そうと努力した先人たちの長い歴史があります(関 1978)。海岸段丘の風衝地にあるこのカラマツ林もその時代の造林地の一つです。植林後60年以上経過してようやく10mの樹高に達しているに過ぎませ

んが、この島の厳しい自然環境のもとで立派に成林しているといえましょう。こうした樹林は島の多くでみられあの時のアカゲラもこの島の自然が長い年月を経て徐々に回復しつつあることを告げに来ていたのでしょうか。

離島でのキツキ類分布の参考になればと遅まきながらご報告致します。また、同期間天売・焼尻両島で次の鳥類が観察されたことを付記致します。

参考文献

- 樋口広芳・小池重人 1978 日本列島およびその周辺諸島におけるキツキ類の生息状況、鳥、25:27~36
 関秀志 1978 天売・焼尻両島の森林、北方林業、30:339~342
 北海道立林業試験場 1978 天売島の自然環境調査報告書、治山調査報告書、35~45

天売・焼尻両島の野鳥リスト

※観察期間は 1977. 5. 16~20 1978. 6. 6~9

種名	天売	焼尻	種名	天売	焼尻	種名	天売	焼尻	種名	天売	焼尻
ウミウ	○	○	ウミネコ	○	○	カッコウ	○	○	ヒバリ	○	○
アマサギ		○	ケイマフリ	○	○	ツツドリ	○	○	ツバメ	○	
コウライキジ	○	○	ウミスズメ	○	○	コミミズク	○		ハクセキレイ	○	○
オオジンギ	○	○	ウトウ	○	○	アマツバメ		○	ヒヨドリ	○	○
オオセグロカモメ	○	○	キジバト		○	アカゲラ	○		モズ		○
ノゴマ	○	○	コヨシキリ	○		シジュウカラ	○	○	スズメ	○	○
クロツグミ		○	オオヨシキリ		○	メジロ		○	コムクドリ	○	○
ツグミ	○		エゾムシクイ	○		ホオジロ	○	○	ムクドリ		○
ウグイス	○	○	キビタキ	○	○	アオジ	○	○	ハンプトガラス	○	○
エゾセンニュウ	○	○	ヒガラ	○	○	カワラヒワ	○	○			

〒068 岩見沢市9条西7丁目

市町村の鳥の制定運動を

三浦 二郎

最近出版された「北の紋章」というユニークな本を、既に手にとってご覧になられた方も多いと思います。私は、或るささやかな御縁で著者の清水敏一・久仁恵御夫妻からこの本を贈られるという幸運に恵まれました。

この本は、道内212市町村のシンボルマークである紋章を蒐集し、それを一枚一枚の版木に刻んで版面に刷り上げ、それに開基と市町村制施行年月日、市町村名の由来と市町村章の由来を簡潔な解説にして附し、一本にま

とめたものです。どこの市町村でも要覧的なものを発行し、その内容にはこれらのことには必ずふれて記載されておりそうなものですが、いざ全道から蒐集するとなると並大抵な苦勞でなかったらしく、編集後記(あとがきにかえて)の中で、

「なぜそれが必要なのか」、「なんのために集めねばならないのか」、という疑問をなげかけられたこともたびたびあったし、ときには「それは商売のために必要なのか」とたずねられたこともあった。

ということです。何事も思い立ってやり始める——ふつうの人がやっていないことであれば尚更(バードウォッチングもそうかな)——時々、通り一遍のことではやり通せないことでしょうが、清水さん御夫妻のお仕事は、道民の郷土意識を高めるという副次的な効果をも考えるならば実に大きな業績として残されると思います。

さて、この本の巻末付録として、前記の解説の要点を一覧表にした市町村一覧表がついており、加えて市町村をシンボライズする花と木と鳥の制定状況が掲げられていました。それによると、花と木については道内で約半数近い市町村が制定を終っているのですが、鳥については十分の一にも満たぬ、たった19市町村だけが制定されているにすぎないのです。どうも鳥というのはトリつきにくいものようです。

今までに制定された市町村の鳥のうち、目立ったものをあげますと、私の住む別海町のハクチョウは、根室市と共に風蓮湖・尾岱沼という日本一の白鳥の湖をもつことから当然の制定でしょうし、羅臼町のオジロワシも知床の秘境の原生林中に営巣する誇るべき鳥としての制定です。厚岸のオオセグロカモメは、単にカモメ(標準和名のカモメでなく、カモメ類一般を総称してのものと思われる)とせず、オオセグロカモメ繁殖の南限地としての大黒鳥やアイカップ岬をもつ誇り(繁殖南限は厳密に

云えばもう少し南下しているようですが)を表わしたものと云えましょう。富良野市はクマガラを選定しておりこれは東大演習林でクマガラを研究なさっている有沢浩氏とつながりがあるような気がします。

とかく大型の目立ちやすい鳥を選ぼうとするが、適当な種類がないので制定が遅れている傾向が感じられます。中型の鳥では札幌市と深川市がカッコウを選定しており、とくにマンモス都市化が進行して緑地がせばめられている札幌市が、初夏を告げるカッコウに自然回復の願いを託しているのは印象的です。帯広市とその隣の中札内村がともにヒバリを選定しているのは、広々とした十勝平野を象徴しており、小型の鳥でもその地域のシンボルとして適切なものが選定されるというよい例だと思えます。

そう考えますと、上記の他にエゾライチョウ、ウグイス、オオルリ、ヒガラ等が現に選ばれてありますが、北海道に生息する野鳥の中で、一般の人にもなじんでもらえそうなものを思いつくままにあげてみますと、アカゲラ ショウドウツバメ イワツバメ キセキレイ セグロセキレイ ハクセキレイ ヒヨドリ レンジャク カワガラス ミソサザイ コマドリ ノゴマ ルリビタキノビタキ アカハラ コヨシキリ オオヨシキリ キクイタダキ シマエナガ ヤマガラ シジュウカラ メジロ ホオジロ ホオアカ クロジ オオジュリン シマアオジ アオジ ユキホオジロ カワラヒワ マヒワ ギンザンマンコ ウソ イカル ミヤマカケス等、それぞれによさがあるように思えます。

市町村の鳥の制定運動を通してその鳥についての知識をPRし、その鳥の生息環境を守ろうとする気運をまき起したならば、愛鳥運動にいくばくかの寄与するものがありそうに思うのですが如何でしょうか。

〒088-26 標津郡中標津町字計根別48線107番地

ウトナイ

54. 4. 1 10:00~13:00

黒田 聖子

雲間から薄日が射して、昨日の時折吹雪くという春の嵐の残雪がキラキラとまぶしく、湖畔は明るく、まぎれもなく春の感触でいっぱいである。一羽のハクセキレイが浅瀬で賑やかに囀っている。一行の中に今日はカラフルなヤッケとリュックの小学生も幾人かおられてほほえましい。最初に向った小さな突堤の途中に猫柳がほころび水辺の冷たい風にふるえている。ゆっくりとチュウヒが舞ってきて見とれていると、向うでヒバリが鳴いていると誰か言う。



探鳥一年生の私は、すべて物珍らしく新鮮な驚きと喜びで、少し離れた氷上の白鳥や水鳥たちの中にオジロワシの幼鳥がいて、その大そうな貫禄にも驚いてしまう。遠くに三羽ほどオオワシがいて、肩羽の白いのが見える。白鳥が三羽美しい飛形で南西に向って上昇していく。春の陽光に光りながら、アオサギの群飛びも、みんな肉眼で見るとは初めてである。

岸边をもどってくると、私達を先導するようにマヒワが先をゆき、左の立木に浅葱色のヤマゲラ、スカンボのような赤い足のツルギの群、今日初めて教わったヨシガモの雄鳥、天賦の色とはいえみなほんとうに美しい。

まだ私には、コガモ、ヒドリガモは見分けられないがキンクロハジロとミコアイサは今日で二度目なので、自

分でもよくわかり、少しずつ覚えていくのがうれしい。

こちらの氷上にはオオワシの幼鳥がいて、私達の昼食を見ているかのよう。折しも59年ぶりの飛来と、今話題のノドグロツグミが再び豊平にの報が入る。

岸边では、白鳥やオナガガモたちが、賑やかに客から餌をもらっている。体力を十分につけて北国へ旅発とうとしているのだろう。

午後からはとてもよいお天気になり、気温も上って暖かく帰宅すると、とても日焼けしていた。

〔記録された鳥〕 アオサギ ヒシクイ コブハクチョウ オオハクチョウ コハクチョウ マガモ カルガモ ヨシガモ ヒドリガモ オナガガモ ホシハジロ キンクロハジロ スズガモ ホオジロガモ ミコアイサ ウミアイサ カワアイサ トビ オジロワシ オオワシ ノスリ チュウヒ ツルシギ カモメ ヤマガラ ヒバリ ハクセキレイ ツグミ マヒワ スズメ カケス ハシボソガラス 32種

〔参加者〕 石川絢子・健介・陽子 梅木賢俊 海野昭彦・冬樹 木村道子 黒田聖子 小杉山哉史 佐藤辰夫 武田忠義・勝利 野々村菊 野村梧郎 萩 千賀 羽田恭子 藤原直人 三木 昇 村田信義 柳沢信雄・千代子 米山露子 22名

〔担当幹事〕 梅木賢俊 三木 昇

野 幌

54. 4. 30 8:45~13:20

野々村 菊

今日は曇りながら風もなく、よい探鳥が出来そうと思った。道立図書館前で幹事の柳沢先生のご挨拶を聞き、造成地の砂利道を森林に沿ってゆっくりと歩きだす。

ムクドリ、ツグミ、ヒバリ、そしてアオジの降るような声を楽しみながら大沢口に着く。菅野さんに教えていただき、福寿草、二輪草、ナニワズ、エゾエンゴサク等可憐に咲くなかを、ユズリハコースに向う。このコースはいつも沢山の鳥に触れあうことが出来るので、楽しいコースの一つである。ニューナイスズメが高い梢に囀り、一方ではウグイスが鳴き、メジロは木々を移りながらも皆の眼を楽しませてくれる。四季美コースの沼ではオンドリの雄がほんの少し姿を見せただけで、あとの水鳥は見つけることが出来ず淋しかった。沼を過ぎると径の両側に水芭蕉の群落がひらけ、水を含んだ水芭蕉の三分咲きほどの白が深閑として、北国の春を感じさせる。大沢園地で昼食。

帰りは桂コースをまわって、ベニマシコの雌、笹藪のあたりではウグイスがちらちらする。その時、まさしく原始林の上を一羽のカモメが翔んだ。内陸の、森林公園では、珍しいことである。

曇りながらも鳥も沢山出てくれて、楽しい探鳥会であった。大沢口で鳥合せをして今日の会を終る。帰りのバス停に向う途中米山さんと一緒に、低い木の枝に知らない鳥を見つける。頭と尾が黒、胸のレンガ色を近々と見る。大急ぎでバス停に行き、羽田さんに尋ねると、それはノビタキのオスであると教えられた。図鑑を示されると、まさに、その鳥であった。背の白の逆八の字も特徴とのことで、新しい鳥をまた一つ覚えることが出来た。

私も遅ればせながら、鳥の魅力に引かれてゆくようです。

〔記録された鳥〕 アオサギ オンドリ トビ オオジシギ カモメ キジバト ヤマガラ アカゲラ コゲラ ヒバリ ハクセキレイ ヒヨドリ モズ ツグミ ヤブサメ ウグイス キクイタダキ エナガ ハシボソガラ ヒガラ ヤマガラ シジュウカラ ゴジュウカラ メジロ アオジ カワラヒワ マヒワ ベニマシコ ウソシメ ニュウナイスズメ スズメ ムクドリ カケス ハシボソガラス ハシボソガラス 種不明カモ 37種

〔参加者〕 柳沢信雄・千代子 岩井 薫 岩間和彦・英子 野々村菊 米山露子 清水幸子 川原浩通 中野進 鶴崎展巨 鬼頭研二 新宮康生 手島圭三郎 十亀トミ 渡部 幸 析本文子 天本治夫・恵子・恵美子・和子 羽田恭子 早瀬広司・富 曾根モト 黒田聖子 谷口登志 野口正男 菅野寿衛吉 29名

〔担当幹事〕 柳沢信雄 柳沢千代子

野 幌

54. 5. 13 8:30~13:40

田中知朗

朝からどんより曇って、あまりよい天候ではなかったが、大変多くの鳥の声や姿が観察できた。

大麻駅から森林公園へ向かう途中、道立図書館前で説明があり、パンフレットが配られた。それから草原を通って行き、ホオアカやオオジシギなどが見られた。園内の大沢口で野鳥の会江別支部との合同探鳥会となった。かなりの人数になったため、ベテランが紹介され、その人たちを中心にいくつかの小グループに分かれたが、各グループともいろいろな鳥を見、それぞれ満足していたようだった。とくに私のいた最後尾のグループでは、クログロツグミが道の横のカツラの木にやってきて、囀りはじめると、メスがやってくるなど、興味深いものも見られた。池ではカイツブリの声を聞いたが、残念ながら姿は確認できなかった。

昼食後、季節はずれの虫の大群と戦いながら、去年使われたクマガラやヤマゲラの巣あとを教えてもらった。残念ながらこの二種も姿は確認できなかった。朝に比べるとめっきり鳥の数が減ったが、ニューナイスズメやカ

ワラヒワが、巣づくりをしているのか、忙しげに飛び回っている様子も観察できた。

私のような初心者には、会のはじめに渡された、パンフレット類や経験者の言葉などは、大変ためになった。ハヤブサがきて、あたりの鳥がみな隠れてしまったことや、ハシブトガラやコガラの違いなどは、なかなか判らないが、そういう時に、経験者がいると詳しく説明してくれるのである。私も前から疑問に思っていたいくつかのことを質問したり、観察中のわからない鳥を尋ねたりしたが、大変明快な答が得られた。

こうした意味でも、探鳥会に参加することは、ためになるようである。私は今回が初参加であるが、今後もたびたび参加しようと思っている。

※「学校で鳥に興味をもっているお仲間はいませんか。野鳥クラブなどは？」と私。

「いや、みんな勉強に忙しくて、第一みんなは歩くのはきらいなようで、歩きたがりませんよ。運動のクラブならあります」と田中さん。

田中さんは、札幌西高校生です。名にし負う受験校ということとはともかく、今までも高校生、中学生の参加は

大変少ないのです。若い人たちへ探鳥の輪が広がっていくことを、心から喜んでおります。(羽田恭子記)

〔記録された鳥〕 カイツブリ アオサギ トビ ハイタカ チゴハヤブサ? オオジシギ キジバト ヤマゲラ アカゲラ コゲラ ヒバリ ハクセキレイ ビンズイ ヒヨドリ モズ トラツグミ クロツグミ アカハラ ヤブサメ ウグイス センダイムシクイ エナガ ハシブトガラ ヒガラ ヤマガラ シジュウカラ ゴジュウカラ メジロ ホオアカ アオジ カワラヒワ ウソ イカル シメ ニュウナイスズメ スズメ ムクドリ カケス カラス種不明 39種

〔参加者〕 堀内 清 曾根モト 谷口登志 黒田聖子 羽田恭子 平野 晃 梅木賢俊 柳沢信雄 仲西正彰 新宮康生 井上元則 宮本勝美 野口正男 野々村菊 清水幸子 栃本健二郎・文子 渡部 幸 十亀トミ 後藤 勇 小野正子 牛島凱男・紀子・由紀子・満紀子・辰男 北尾久勝・諭 楡木泰彦 山田悠子 北原義章 金子誠一 早瀬広司・富 九島至郎・悟郎・真佐治 村野紀雄 岩泉ゆう子 岩間和彦・英子 田中知朗 小杉山哉史 43名

〔担当幹事〕 柳沢信雄 野口正男

昭和54年度 総会 経過報告

とき 昭和54年6月12日(土) 午後1時半

ところ 北海道婦人文化会館

総会は柳沢代表幹事の司会で始まり、井上副会長を議長に選出した後、次の事項について審議がなされ、原案通り承認成立いたしました。出席者23名

(1) 昭和53年度事業報告、決算報告及び監査報告について

〈事業〉1.探鳥会の開催(53年4月から54年3月まで12回実施)。2.野鳥だより発行(32号から35号まで4回発行)。3.会議等の開催(53年度総会を含めて4回開催)。4.その他の事業(干潟鳥類全国一斉調査を2回、野鳥の分布調査の継続等)。

〈決算〉

収入の部

区分	決算額	予算額
会費	431,100	444,000
寄付金	13,000	10,000
雑収入	9,069	1,907
繰越金	140,093	140,093
計	593,262	596,000

支出の部

区分	決算額	予算額
印刷費	240,800	240,000
通信費	172,220	140,000
会議費	66,975	74,000
その他	66,875	142,000
計	546,870	596,000

差引残額 46,392円

〈監査〉正確、適当なものと認められました。

(2) 昭和54年度事業計画及び予算案について

〈事業〉1.探鳥会の開催(54年4月から55年3月まで

12回開催予定) 2.野鳥だよりの発行(36号~39号まで4回発行予定) 3.その他の事業(干潟鳥類全国一斉調査の協力2回予定、スライド写真会 新年懇談会 野鳥分布調査等を予定)

〈予算〉

収入の部

区分	予算額	摘要
会費	400,000円	個人 1,000円×370人 団体 3,000円×10件
寄付金	10,000	
雑収入	21,608	
繰越金	46,392	参加費 20,000
計	478,000円	

支出の部

区分	予算額	摘要
印刷費	210,000円	会誌 160,000円 資料等 50,000
通信費	140,000	送料 100,000 その他 40,000
会議費	50,000	総会、役員会、編集会等
報償費	44,000	事務所謝礼、手当
その他	34,000	消耗品、発送費等
計	478,000円	

(3) その他、事務局が北海道自然保護協会に移りました。

(4) 役員選出

会 長 犬飼哲夫
 副 会 長 井上元則 斎藤春雄 新妻 博 土屋文男
 代表幹事 柳沢信雄
 幹 事<総務> ○柳沢信雄 飯山五玖子 金田
 寿夫 中田克道 野村梧郎 島田明英
 <広報> ○小堀煌治 小川 巖 谷ロー芳
 萩 千賀 村野紀雄 三木 昇
 白沢昌彦 谷一敏昭
 <探鳥> ○羽田恭子 梅木賢俊 亀尾紋
 十郎 小沢広記 野口正男 平井さち子
 柳沢千代子 早瀬広司
 <会計> ○新宮康生 岡田幹夫
 ○印代表者
 監 事 荻野寿衛吉 佐々木 勇

54年度第1回役員会の報告

5月29日、今年度第1回目の役員会及び役員会が北海道婦人文化会館で行われ、以下の各項を討議、決定しました。

1. 事務所移転の件：移転計画の経過報告があり、6月11日から自然保護協会に移転することを決定し、会員及び関係各位に徹底することを確認。
2. 役員決定の件：総会から委託された役員決定。
3. 会費納入の件：会員は原則として年度始めに納入してもらう。今年から会計と総務の仕事を分離する。
4. 会員増強の件：減少傾向にある会員を今年度は何とか増やすよう、具体的な検討を始める。

目チェックリストだより目

去年、環境庁から日本野鳥の会に委託されて実施した「野鳥繁殖状況調査」に協力した本会会員も多いかと思えます。この調査は5万分の1地図に相当するメッシュに区切り（道内で約270区画）、鳥種ごとの生息と繁殖の状況を調査したものです。

道内はいうに及ばず、全国規模のメッシュ図が出来れば、種類ごとの傾向が一目瞭然になる訳で、その意義の大きさは認めないわけにはいきません。けれども相当無理をして仕上げたという感じは否定できません。なぜなら1メッシュ（約400km²）に、せいぜい2、3地点の調査区を設け、1回か2回回りの調査結果に過ぎないからです。加えて、大部分の調査は夏に集中

したもので、それ以外の時期に出現する鳥は、どうしても抜け落ちてしまいます。環境庁の調査結果は恐らく来年になってから公表されるでしょう。それを見て、分布図はすでに完成してしまったなどと早合点するには及びません。例えば悪いかも知れませんが、環境庁のメッシュ分布図は、必要に迫られた揚句に急造したバラック—早晩、誰が考えても建て替えなければいけないシロ物です。

そこへいくと、私達の目指しているチェックリスト「事業」は、レンガを会員が一つ二つと持ち寄って作り上げた強固な建築物の造営作業にも等しいものです。地元に住む者がデータを蓄積した結果に優るものはありません。今シーズンの結果を一同期待しております。



<探鳥会幹事から>

35号で探鳥会に対するご意見を伺いましたが、地方の方から、道央中心なので、年に一度でもよいから、羅臼や尾岱沼、風蓮湖あたりを企画してほしいとのご要望がありました。（中標津、梅本様）。私共も道東は、最も魅力のある土地でもあり、全道的な視野に立って、順次地方でも探鳥会が実施されたら……と、毎年夢は広がるのですが、なかなか実現に至りません。愛護会創立の頃は、年に一度、愛山溪や十勝岳へ一泊探鳥会を行った実績もあるので、地

方の方々との交流を深めるためにも、来年度は、何とか実現に努力したいものと考えております。

探鳥会幹事

064 札幌市中央区円山西町3-3-26 羽田恭子

事務所移転のお知らせ

総会報告にもありましたが、事務所が国土緑化推進委員会から、北海道自然保護協会に移りました。今後の連絡および送金等ご注意事項です。なお、郵便振替の番号は変わりません。

新住所 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル
 北海道自然保護協会 気付

○チェックリスト御希望の方は事務所まで連絡下さい

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

いろいろ書きたいことはありますが、スペースの都合上一言。6月中旬、苫小牧近郊のウトナイ湖で、野鳥の会全国大会が開かれました。その際野鳥の聖域サ

ンクチュアリーの建設が大きな話題となりました。まだ、あまり具体化していませんが、これが早く実現し、鳥仲間が、またたくさん増えてくれればと思っています。（三木記）

〒060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付
 電話 (011) 251-5465番 郵便振替 小樽18287